

第1回 仙台市集団移転跡地利活用検討委員会

日 時	平成28年11月23日（水・祝）14:30～15:30
会 場	エルパーク仙台5F セミナーホール
出席者	姥浦委員、吉川委員、今野委員、西脇委員、山崎委員
議 事	1. 開会 2. 都市整備局長あいさつ 3. 委員紹介 4. 委員長選出および副委員長指名 5. 委員長あいさつ 6. 議事 （1）委員会の運営について （2）集団移転跡地の利活用について （3）その他 7. 閉会
配布資料	資料1 委員名簿 資料2 仙台市集団移転跡地利活用検討委員会設置要綱 資料3 検討委員会の運営について 資料4 集団移転跡地の利活用について 参考1 南蒲生復興まちづくり構想図 参考2 新浜の「浜」を活かす ニュービーチプラン 参考3 仙台の海辺を歩こう！藤塚・井土浦マップ2016

【0. 委員への委嘱】

（出席委員への委嘱状交付）

【1. 開会】

事務局： 全5名の委員が出席していることから委員会の定足数を満たしている。
会議は原則公開。

【2. 都市整備局長あいさつ】

鈴木局長： フォーラムの中で市民の方々から様々なご意見をいただいた。

[キーワード] 持続性 ・ ユニークさ ・ 地域性 ・ 安全性の確保
幅広い意味を持つ“交流” ・ 土地利用の融通性

委員会の中でもこのキーワードに触れながらご議論いただきたい。本委員会は委員に諮問するスタイルではなく、自由闊達なご議論をしていただきたい。市として責任を持って参考にしながら土地利用をまとめていく。

【3. 委員紹介】

【4. 委員長選出および副委員長指名】

事務局： 事前に委員の皆様にご挨拶いただきましたので報告する。
委員長を姥浦委員に、副委員長を吉川委員に決定した。

【5. 委員長あいさつ】

姥浦委員長： フォーラムで市民から出た意見は全体的に見ると、市が考えるところと一致する部分が多かった印象である。それをどう具体化していくのかが肝である。
委員会はその辺りについて市に意見するチャンネルとして自由な議論をする。

【6. 議事（進行：姥浦委員長）】

（1）委員会の運営について

姥浦委員長： 本日の委員会議事録の署名人については名簿順で今野委員にお願いする。

（2）集団移転跡地の利活用について

姥浦委員長： 検討委員会で意見交換を行う内容について、事務局から資料の説明をいただく。

（事務局による資料説明）鈴木係長：

- ・ 基本的な枠組みとして、事務局である仙台市から提示された内容について、各専門家の立場からご意見いただきたい。仙台市は本委員会の提言を踏まえ、集団移転跡地の利活用方針をとりまとめ、最終的には仙台市震災復興推進本部会議にて方針を決定することとなる。
- ・ 今回の論点の整理として、第1回目は東部沿岸地域全体や各地区の土地利用の方向性についてとなる。2回目は利活用方針の具体的な内容、3回目で提言のとりまとめとなる。
- ・ 以降の資料はフォーラムでの説明と同様なので省略する。

姥浦委員長： 今回は初回であり、先ほどの仙台市からの説明やフォーラムでの意見を場合によっては踏まえた上で各委員から順番にご意見をいただきたい。一人10分程度、名簿順で今野委員からお願いしたい。

今野委員： 地元仙台で60年近く事業をしているユーメディアという会社にいる。地元情報誌エススタイル、コミュニティFM放送局としてラジオ3、イベントとしてオクトーバーフェスト、サンモール一番町で伊達美味マーケットなどをさせていただいている。地元のメディア、イベント事業に携わる者、地元の企業経営に携わる立場として意見させていただく。

地元の皆様の意見を十分汲み取った方針としたい。元の住民が戻って活動することが可能になるのか。若い世代の方々が、生まれ育った土地で将来的に何かチャレンジできる環境があると良い。

応募する事業者が繋がりを作れる仕組みや場ができないか。それによってこ

の地域全体の価値を高めていける仕組みがあると良い。

事業者間や事業者と地元の人との協議会のようなネットワークが重要である。

六丁目駅、荒井駅付近は若い子育て世代が多い。子供を持つ若いお母さんたちが安心して働ける職場が仙台にはまだまだ少ないので、若い世代の雇用を生めると良い。

資料の中にある「海辺を歩こう」にあるように井土浦の自然は子供達や家族づれが体験できる場になると良い。

姥浦委員長： 住民の意見を聞きながら考えていくべき、事業者間や元住民とのネットワーク、協議会のようなものを考えたら良いのではないかと。元住民、若い人、女性が関われる、経済的な観点からも持続可能なものにしていきたい。という話であった。

西脇委員： マイクロソフトという海外の会社におり、外側からの立場で意見させていただきたい。自分自身は発災後東北地方各地でずっとボランティア活動を行った。

仙台市と協力して荒浜でドローン空撮を行った。ドローンは目線より高く1000mくらいまでの高度で、航空写真とは違った新鮮な映像が撮れる。荒浜をドローン撮影した時にこういう街だったとわかって感動した。東京の人間は今の荒浜がどういうところかは誰も知らない。もちろん海外の人も知らない。知っていただかないと交流はスタートしない。コンピュータやインターネットの力はそれを可能にする。その様なお手伝いをしたい。

ドローンによる数百枚の写真撮影によってコンピュータを活用すれば、地形や建物を3Dグラフィック上で再現できる。自由に見る角度も変えることができる。土木や建築が必要なく公共工事の大型予算もいらない、実際の土地を荒らさずに済む。コンピュータとICTを活用するとこのようなことができる。知るということがコンピュータやインターネットの力でできる様になってくると良いと思っている。

私は震災前に地域の人たちがどのような暮らしをしていたのかを知りたい。子供たちと一緒に被災地に行った時にスマホをかざせば5年前、10年前の様子が見られるようにしたい。そこに地元の人が昔の様子を語りかければ、立派な世代間交流が起きる。

街自体をスマートにする、というのは美しく、カッコよく、住みやすくする、ということである。先ほどのフォーラムでもおしゃれな街にしたい、という意見もあり私もそう思う。仙台と同じスペインの事例（10kmの川と10kmの海と山が近くにある）。バルセロナの街灯は、電気を灯すだけではない。おしゃれな街灯に気圧、汚染、温湿度、照度がアプリケーションでログインすれば世界中からすぐにわかる。これを応用すれば荒浜が今どうなっているか、どのような活動があるかも発信することができる。腕に巻くウェアラブルデバイスによって、活動を発信しあえる、10km走った、500kcal消費した、美

美味しいものを食べたなど。海外ではペットに装着させて、どこの海岸でいつどれくらいのペットがいるか、健康かどうか、がスマートフォンでわかる。

フォーラムを伺って、若い世代の意見が出ていた。若い世代とは次にバトンを渡す世代である。今の小学生、中学生を中心に、高校生、大学生に伝えなければならない。広島の平和記念公園を訪れる最も多い世代は、小学生、中学生、高校生の修学旅行である。伝統と歴史と平和を願う気持ちを持つために訪れている。仙台も同じ様になるべきであり、ICTの面でお手伝いすることが必要と考えている。

姥浦委員長： 空間として何を残すのかという視点だけではなく情報技術でもカバーできる。防災教育、修学旅行においてもICTが分担できる部分が広がってきているという重要なご指摘であった。

山崎委員： 日本政策投資銀行の東北復興・成長サポート室に所属している。会社やプロジェクトに対して資金を融資している。地方銀行と一緒に復興ファンドを立ち上げて復興支援融資を行っている。仙台市などが持っている公共施設のマネジメント、官民連携、公民連携などのサポートを行っている。今回、仙台市と民間との官民連携の活動を成功する様に全力で応援したい。

フォーラムでの住民のみなさんの意見はその通りであり、それらを組み込んだ方針を作って欲しい。仙台市から提示された5つの地区の方針案について大きな方向性は違和感ない。ただし、実際には色々な方に方向性にあった事業を提案してもらわなければならない。そのため公募の際にはその方向性をわかりやすくかつ詳しくメッセージを出していく必要がある。ただし、あまり細かな要件を出して自由な発想を縛ってはいけない。

5つの地区について。荒浜地区は最も広くて、民間特に企業から魅力がある地区であろう。募集の仕方次第で提案は来ると思う。一方で、南蒲生や新浜、井土などは面積が小さく、それぞれ町内会や地域が自ら運営して、地域で管理し親しまれていくコンセプトは良い。藤塚地区は現地を拝見したところ、自然環境が豊かで、それを残すコンセプトはそうすべきだと確信した。最近色々な被災地を拝見するとセイタカアワダチソウが生え放題の荒地となっており、そうしないために管理をしっかりとる必要がある。銀行の視点からすると事業は持続的にキャッシュが回ることを肝要だが、一般的に自然環境の保全を考えた時に、それ自体ではお金を生みにくいと想定される。公募する際に、土地の賃借料や周辺環境の整備など仙台市から十分なインセンティブを付与する必要がある。コンセプトをしっかりと徹底する必要も藤塚地区にはあると考える。

フォーラムでも海水浴場を再開してほしいという意見があったが、私もそう思う。夏に子供を海水浴に連れて行こうとしたが、まだ太平洋側では海水浴場が再開していないことが改めてわかった。水と親しむ場がない。そのため、仙台のこの場所で深沼海水浴場の再開は必要と思う。

最後に一点。フォーラムでも地域の歴史、風土、風習をしっかりと反映させて事業を進めてほしいという話はその通りだと思う。反面、跡地は仙台市が買い上げた土地。沿岸部の地域以外の方が交流とチャレンジとって整備をした時に、交流のためにユーザーというかそこに来るといふ潜在的なニーズは百万人いる。よくサイレントマジョリティというが、内陸の方たちの声がよく見えてこないのが気になる。どういったところであれば行ってみたいと思うのか、そこも含めて声を拾っていければと思う。

姥浦委員長： 仙台市の基本的なコンセプトは良い。今日フォーラムに来られた方は気持ちを共有しているが、来られていない人が応募する際に、みなさんの意見をどうわかしてもらおうのか。また、お金の面、経済的な持続性を考えないとどこかで歪みが起きてしまうのではないかとご指摘であった。

吉川副委員長： 震災後は八戸や南三陸町に通った。八戸の小さな浜ではアートプロジェクトを通じて、そこにどういった暮らしがあるのか、をテーマにやってきた。被災エリアに気持ちはある。私は仙台生まれ仙台育ちである。子どもの頃に深沼海水浴場の波で泣いた覚えがある。今日のフォーラムでのたぐさんの方のお話、一つ一つ共感できた。もっと話を聞きたいと思った。この後、いろいろな人が入ってくる時に、これまでお住まいだった方が、ここが自分の土地だったと思える何かを維持できるのかどうか心配になった。

交流というキーワードがでており、ここが交流エリアになって人が入ってきてほしいが、どういうところに人が入ってくるのかをちゃんと考えなければならない。いろいろな機能を振り分ければ人が来るのか、といえばそれはどこかのウォーターフロント開発と変わらず、失敗している事例もある。

どういうところに人が集まるかといえば「感動する」ところである。感動するところには人が来る。感動が何から生まれてくるのかを真剣に考えるべき。一番は土地の力。土地は生活していた皆さんにとって、かけがえのない場所。

その土地にかかわり続けることができるのか。全く来たこともなかった人がかかわり続ける場があるのか。人がかかわり続けないと土地は死ぬ。生き続けない土地に人は来ない。南三陸町は人口が減っているとよく言われるが、私は心配していない。感動があるから。今、ものは何もないが。

住んでいた人、仙台市民、その他の人、多くの人たちにとって大切な場所にしていく。

アメリカの911メモリアルは観光地になってたぐさんの人が訪れている。しかし、友人と訪れたが話をすることができなくなった。水がゴーというすごい音でしゃべることができない。プールのパラペットに名前が刻まれており、夜には光るようになっている。思わずそこに刻んである名前の死者に想いを馳せることができる。この一枚の写真ですべてがわかる、感じる。いちいち説明するより伝えることができる。ここを訪れた人の体験になる。刻まれた名前の配

置について、多くのボランティアが関わっている。親戚、職場ごとに配置するなど。このメモリアル施設は多くの人たちにとっていかに大切な場所にするかということをもみんなで実現した施設である。

世界の人を呼び込めるような施設を作るのならば、大事なのは訪れた人が手触りを感じることである。神戸の人と防災未来センターは今は人が少ない。

そこにあった人生を思う、暮しを思う。失ってしまったものを大切にしていた誰かがいることを感じる、ことが手触りである。目に見えないもののリアルを感じる。冷たい、ザラザラといったものを心で体感すること。

手触りはそこにある「こと」や「もの」を自分ごとにする。自分ごとにならないければどんな立派な慰霊碑を作ってもダメだと思う。何人亡くなったか、津波がこの高さできたという数字は伝えてもすぐに風化する。伝えるためには人がかかわり続けるしかない。かかわり続ける場がこのエリアにあることが大事。

人が関わるという事例でNYのハイラインがある。高架の廃線が犯罪の温床になっていたが、たった二人の若者が立ち上がって市民運動によって再生した。線路を長い遊歩道にして、植栽をした。市民に愛されている。ボランティアが長い間運動をしていく上で立ち返るコンセプトはシンプル、スロー、クワイエット、ワイルド。周りにカフェなどができて地価も上がっている。多くの市民がかかわり続けている事例である。

国内の瀬戸内芸術祭の事例。小豆島でワン・ウェンチャーという芸術家が、竹のドームを3年ごとに島人と一緒に作る。みんなで5000本の竹を切り出すところから始める。自分たちが生きてきた場所にアーティストを通じてかかわり続ける、生きてきた記憶に出会ったり、よその助人たちが暮らす人と交流ができた、共に活動する喜びを感じる、といった物語があるから感動する。少しでも関わった人はいつ来ても自分の土地だと思えることができる。

食と農のエリアに通じる事例。美術館を作る際に周囲の荒れ地を島民と一緒に非常に美しい棚田に再生した。全て地元産のお弁当も売れている。感動があるから人も来る、カフェもお弁当屋も儲かる。施設があるから儲かるわけではない。

ボルタンスキーが巡礼の地を豊島に作っている。自分の大切な人の名前を風鈴の短冊に書く。これを山林に吊るして、無名の個人の記憶を留めて、巡礼の地にする。見えにくいが行くとチリーンチリーンと音がする。こういう物が仙台になくて良いのだろうかと思う。

難民をテーマにした、海辺に子供の砂の像を島民と一緒に作って並べたリン・シュンロンの作品。波で洗われ、なくなると白い花が出てくる。私は津波を思い出した。自分の体験になるような感動がある場所が必要。

これは木の根を空間に吊るした作品だが、これだけでも何十年の歴史にビジターが心を寄せることができる。

私は、土地の人が生きてきた場所に、住んでいた人も私たちビジターも関わられる場所が必要だと思う。その人々が生きてきた記憶に出会って、被災の現実

に遭遇して、亡き人を悼んで、共に過ごした日々を全然関係のない私たちビジターが想う。その人たちと共に喜びを得られる様な場が運営されることが必要だと思う。

色々なものが入ってくることはその通りと思うが、このエリアがこういう場所であったということがシンボルとしてわかり、ビジター一人一人にとっての大切な場所になる何かを作ることが必要。

姥浦委員長： 一人ひとりにとって大切な場所を作る。そのためには、皆が自分ごととして関われる様にする事で、震災の記憶や様々なものを残すことができるという話であった。

最後に一言。この土地が出てきた背景を基本として立ち戻らなければならない。加えて、多様な方々が入ってくる多様性をどの様に確保するか。その方々をどの様にネットワークし、相乗効果を作っていくことが非常に重要である。震災の記憶をどう伝承していくのかについても物を残す、ICTの力を使って、アートの力を使って、地元の方の語り部など様々なやり方がある。この多様性、それらをつなぐ人と人のネットワークをどの様に作っていくのかが、これから具体的な話を考えるほど大切であると感じた。時間が過ぎているので、その他の意見があれば事務局までメール等で寄せて欲しい。

【7. 閉会】

事務局： 第2回の検討委員会は12月20日（火）エルパーク仙台5Fセミナーホールにて行う。何か意見等ございましたら事務局までメール等でお寄せください。

姥浦委員長： 以上で、第1回委員会を終了いたします。

以上

議事録署名人

平成28年12月20日

委員長 姥浦道生

平成28年12月20日

委員 今野彩子